

FREE

vol.

1

創刊号

ふるさと再発見! 【ほうぼ・わかやま】

HOUBO

WAKAYAMA

巻頭
特集

和歌山城再建

50
周年を
語る



●紀州の歴史・文化

雑賀崎のハナフリ
木本の獅子舞



●散策

歴史を想い、
城下町を散策



語る

昭和20年7月の和歌山大空襲にて焼失した和歌山城が、市民の力によって昭和33年に再建されてから、今年で50周年となります。記念すべき創刊号の巻頭特集は、和歌山城の再建当時に立ち会い、今も和歌山城を見守っておられるお二人に登場して頂き、和歌山城への想いをお聞きいたしました。

和歌山城再建の板金工

米田 正豊さん

(米田板金工作所、一級建築板金技能士)



和歌山城を手がけたことは「人生一番の財産です」

和

歌山城再建（昭和32年6月～33年10月）の板

金工事には、大天守に谷口板金、小天守と4つの門に山口板金が請負業者として指名された。その山口板金に当時勤めていたのが、米田正豊さん（74）だ。棟（*注1）を銅板で巻いたり、妻側（*注2）に銅板を張ったりという作業が主な板金工事だった。「我々は千鳥と呼んでいました。妻側は、銅を焼いて、たたいて、波形に打ち出して、そして、張るんです。それは大変な作業で、一日に三、四枚しか作れないんです」という。銅板は0.8ミリという、人の手では到底曲げられない厚さ。「腐ったりすることもないでしょうし、おそらく末代でしょうね」と城建築の重厚さを象徴する。

若手板金工として

作業場でつくった銅板を、まだまだ車が少なかった当時は、和歌山城の現場まで単車で運んだ。その銅板を運搬機で屋根まで運んだ。しかし、作業員は足場を伝って登るので、一時間くらいいかかったという。城という



左:「現代の名工」受賞祝賀会の式次第
右:「黄綬褒章」受賞祝賀会の式次第



大天守3階から見る小天守の棟



棟の先端、鯉（しゃちほこ）部分



小天守入口上部の蛙股（かえるまた）



大天守2階から見る小天守



妻側のアップ。破風（はふ）※
※妻側の三角形部分の造形。
和歌山城の破風には、うろこ状の青海波（せいかいは）模様が装飾してある。

巨大な建築現場らしい思い出だ。作業員の殆どが30代以上の中、米田さんは当時24歳だった。「和歌山城のような大きな仕事は、とても24～25歳にさせてもらえないようなものじゃない」というのが当時の職人の世界。「留める間、こもつとれよ」と親方に言われ、銅板を持って支えたり、すでに職人が仮打ちしたところの釘を打ったりした。そうしながら、親方や職人の技を目で盗むことが仕事を覚える唯一の方法だった。

錆色に感動が増す

10年20年経って、銅板の色が「赤」から「黒」へ、そして青い「錆色」に変わっていくにつれ、感動が大きくなってきたという。「今の棟なんかは、ものすごくいい色ですね。それを見るとやはり『やっぴよかったなあ』という気持ち湧いてくる」そうだ。

他府県から和歌山を訪れたお客さまを案内するのに和歌山城に上ったことが再建後、一度だけある。ただ、生まれた子どもたちをお城の動物園にはよく連れ

ていった。下からお城を見上げながら、「お父さん、あの仕事やっぴよや」と言ってみたが、幼い子にとっては「へえ」という返事だったと笑う。その子もたちも「お父さん、やっぴよやったなあ」とねぎらいの言葉をかける大人に成長した。和歌山城を手がけたことで、周りから信用を得ることももつなごうとした。「もう、それは私の人生の一番の財産です」と感謝する。平成12年には、現代の名工に贈られる「卓越技能章」を、そして、平成17年には黄綬褒章を授与されることになった。「これも和歌山城再建にたずさわったからでしょう」。

今でも週に一、二度は現場の屋根に登る現役だ。しかし、年齢のために膝が思うように動かず、和歌山城のような長い階段の上り下りは難しい。「でも、受章したこともあり、足が治ったら、いっぺん登って近くで見たいと思います」と、74歳の板金工は再建50周年を心の中で祝う。



米田さんの銅板は、今も和歌山市を温かく見守っている



大天守の横にある小天守、和歌山城の入口も兼ねている

(*注1)棟：家屋の頂上を横に突き通す木。
(*注2)妻側：棟に対して直角に接する側面のこと。

巻頭
特集

和歌山城 再建50周年を



再建現場を8ミリカラーフィルムに記録した

武本 弘さん

(日本アマチュア映像作家連盟)

再建時の市民の盛り上がりは「そりゃもう、凄かったですよ」

今

年、再建50周年を迎える和歌山城。その和歌山城の再建当時に、アマチュアの8ミリカメラマンとして立ち会い、しかもカラーフィルムで撮影された方がいる。和歌山市在住の武本弘(76)さんが、その人だ。

20代の頃、アメリカ進駐軍からの放出品である16ミリフィルムカメラを手に入手し、ご自身の手で3年の月日をかけ8ミリフィルム対応機へ改造。ちょうどその頃、和歌山城の再建工事が始まり、武本さんはこの工事を映像に納めようと思いつく。武本さんは和歌山市と工事現場の棟梁に、口頭で撮影許可を得て工事現場に通い詰めた。

城再建の目撃者に

現場に通い詰めるうち、工事作業員と次第に仲良くなり、特別に木組みの足場に登らせてもらったり、作業員の間で撮影させてもらえるようになった。「木組みの足場はとも不安定で、歩くとグラグラ揺れて怖かったですよ」と、武本さんは当時を振り返る。

城の再建のような大規模な工事としては、作業員は少なかった。20〜30人程度の人数の作業員が、

殆ど手作業で作業していた。しかも、1年5ヶ月の工期の間、絶え間なく毎日作業していたわけではなく、半月くらい殆ど作業が止まっていた時期もあったという。再建工事中に一度の夏があったのだが、偶然にも一度も台風は来なかった。「台風も遠慮してくれてたんですかね?」と武本さんは笑う。

し、お堀もすっかり汚れた。街のシンボルであるはずの和歌山城のこの現状が、今の和歌山市民の自分の街に対する意識の表れなのかも……と残念に思っています。再建から10数年ほど経った頃から、和歌山城の扱われ方に危機感を持った武本さんは、和歌山城を中心とする和歌山市の情景をボエム風に撮影した「公園の詩」という作品を撮影。この作品をカナダとオーストラリアの国際フィルムフェスティバルに出品したところ、見事どちらも世界総合2位の栄誉に輝いた。オーストラリアに至っては、「ベストトラベル賞」も同時受賞した。

昭和33年10月、和歌山城は再建を果たした。武本さんは当時の印象を「青空に映え、漆喰は抜けるように白く、瓦は太陽の光でキラキラ光った。感無量だった」と振り返る。

「私は和歌山市という美しい街の情景を、映像という形で世界中に紹介してきました。映像を見て頂いた世界の方々からは、この街はとも美しく素晴らしい、と高い評価を頂いた。だからこそ和歌山市民には、自分たちの街の魅力を、素晴らしいことを誇りに思ってもらいたい。」

城と街をもっと大切にしたい

今の和歌山城を武本さんは「市民からの扱われ方がすっかり変わってしまった」と残念がる。「今、和歌山城は漆喰が剥かれるなど汚れてきています。落書きもある

和歌山城再建から50年。和歌山市民にとってこの50周年という節目は、自分達の住むこの街をこれからどうしていくかを考える、いい機会にするべきかもしれない。



2nd BEST DOCUMENTARY FILM 1990 CANADIAN INTERNATIONAL AMATEUR FILM FESTIVAL



オーストラリアやカナダを初め国内外で多数の受賞歴を持つ



起工式、高垣市長(当時)の姿



手作業で基礎を築く様子



木組みやぐらは歩くと揺れた



天守閣が形になってきた頃の様子



お城祭りはまるで大名行列のよう



路面電車はたくさんのお花で飾られた



小さな子供も祭りを盛り上げた



当時、和歌山にもいた芸者たちが太鼓をたたく



雑賀崎の ハナフリ

太陽からこぼれ落ちる感じで
いろいろの色の玉は
自分の足元に落ちてきて
感動した。

※写真は、ハナフリの情景を写したものではありません。

和

歌山市の南西部に位置する漁業集落、雑賀崎。雑賀崎の陸域と島嶼は瀬戸内海国立公園に指定されており、その景観は万葉集にも詠まれたところでもあった。海岸は、すべて緑泥片岩と言われる青石。水に濡れると宝石のように輝く。断崖と磯の景観は格別で、自然景観として今もその姿をとどめている。また急な山肌に建ち並ぶ家々と小路、どこか懐かしくノスタルジックさを漂わせる。

お彼岸のハナフリ

この地にお彼岸の中日に「ハナがフル（花が降る）のをみる」民俗があることが知られている。簡単に説明すれば、お彼岸の中日に西の海に沈む夕日から「ハナがフルのをみる」風習である。それはいつのころからか…お彼岸の中日には「ハナ降んの見に行こか」と言って、近所の小高い場所へ見に行ったという。「どんなふうに見えるのか」という質問に、ある人は「太陽が一枚一枚剥がれてくるように…」ある人は「七色のシ

ヤボン玉のようなものがたくさん落ちてきた」という体験者の調査結果がでてきている。それぞれ回答表現は違っているが、体験した誰もがみな和やかに、輝きに満ちた顔つきで「ハナフリ（花降り）」を語ってくれる。そして共通していることは「忘れられんもう一度見たい」の一言であり、とても印象深く感動的な体験だという。しかもこの現象はお彼岸の中日にしか見えないという。もちろん天候が重要なポイント。まさに奇跡である。蜃気楼のように、海に光が反射して見えるものではないかとも推定されるが、専門家による科学的な説明はまだない。

この地以外で、「ハナフリ」と同じ風習や、他の地域でも見られるかどうか調べたところ、和歌山市の他の地区や岸和田市にも同様なものがあり、また関連があると考えられる言い伝えや民俗がほぼ全国にも分布していた。大阪府岸和田市土生町には「お彼岸の中日に日の出・日の入りを拝むと花が降る」という言い伝えもあることから、太陽信仰が

ハナフリは
自然からの贈り物



雑賀崎漁港

今回、「トングの鼻自然クラブ」のメンバーに取材協力を頂いた。活動内容の一つに「夕日を見る会」を1998年から春と秋のお彼岸に二回ずつ開催している。かつてはお彼岸といえば「ハナがフルのをみる」ことが日常的なことであり、特別な行事として行われていたわけではない。お彼岸の中日には祖母が孫を連れて村中で誘い合わせ、思



「トンガの鼻自然クラブ」のメンバー

「トンガの鼻自然クラブ」について

「トンガの鼻」は、雑賀崎北端にある岬で、紀州藩が海防のため造ったとされる台場跡があります。

「トンガの鼻自然クラブ」は、トンガの鼻の歴史環境と自然環境を保全し、活かすための活動をしています。是非多くの方の参加をお待ちしています。

<http://www.jtw.zaq.ne.jp/tonganohana/newpage1.htm>

TEL&FAX 073-447-0844

「近所のおばあちゃんに聞いてねえ」「友達のお母さんが、一緒に見にいこうと誘ってくれて…」雑賀崎の近所のふれあいから受け継がれた「ハナフリ」。

こんな風習だけでなく、自然との共存、この町を愛着する人間性、また家族や地域との繋がりをごく自然に伝えていきたいと語ってくれた。



思いに小高いところに登ってみたい。埋立問題が起こり、この雑賀崎について話している中、「ハナフリ」の風習が思い起こされた。これを契機に「夕日を見る会」などのイベントを開催し継承への取り組みが行われるようになってきている。

雑賀崎は、「ハナがフルのをみる」という感動的な風習の他に、自然との共生、温かい人間性、現在忘れかけた大切な何かを添えてくれる。「ハナフリ」はこんな雑賀崎を愛するすべての人たちへの自然からの贈り物かもしれない…。



だりんじりか
らそびえ立つ地上5メートルほどの高さに渡された青竹の梁の上で、笛や太鼓の拍子に合わせて獅子舞い踊る。獅子の頭

をぶんぶんと振り回したり、逆立ちや足を引っ掛けてぶら下がったりと、観ているこちらがハラハラしてしまう。こんなにダイナミックな獅子舞は見たことがない。

毎年10月、和歌山市木ノ本にある木本八幡宮の秋祭りで奉納される木本の獅子舞。いつ始まったか記録には残っていないようだが、500年から600年の伝統を持つと伝えられている。鎌倉時代から室町時代の初期ということになる。

現在では和歌山県指定無形民俗文化財に認定され、木ノ本獅子舞保存会の方々が演じている。

この獅子舞、中に入って舞うことができるのは、独身の男性と決まっている。保存会の方々は、10月1日の練習開始日から、獣の肉は食べないなどの徹底した精進潔斎を始める。この期間を通して

秋祭り

木本の獅子舞(和歌山市木ノ本)

精神を集中させ、本番の秋祭りに臨む。今まで一人もケガ人が出ていないというから驚きだ。

獅子舞は男性二人が胴衣に入って演じる。地上での舞と、だんじりの上での舞の二種に分かれる。地上での舞は、竜の舞・孔雀の舞・鶴亀の舞・ねんころり・居眠り・股ねすりなど。迫力満点で、うしろ側の人が頭側の人を片手で担ぎ上げたりと見どころ満載だ。

ハイライトはだんじりの上での舞で、その迫力たるやケタ違い。目を閉じるのも勿体ないほど。百獣の王たる獅子が、幼い獅子を谷底に蹴落とし、這い上がったくる獅子を待ちながら谷底を覗き込む姿を舞う。これを何度も繰り返して、元気な我が子を見て安心して目が覚めると威勢よく頭を振り乱して舞い踊り、最後は静かに梯子を下りていく。

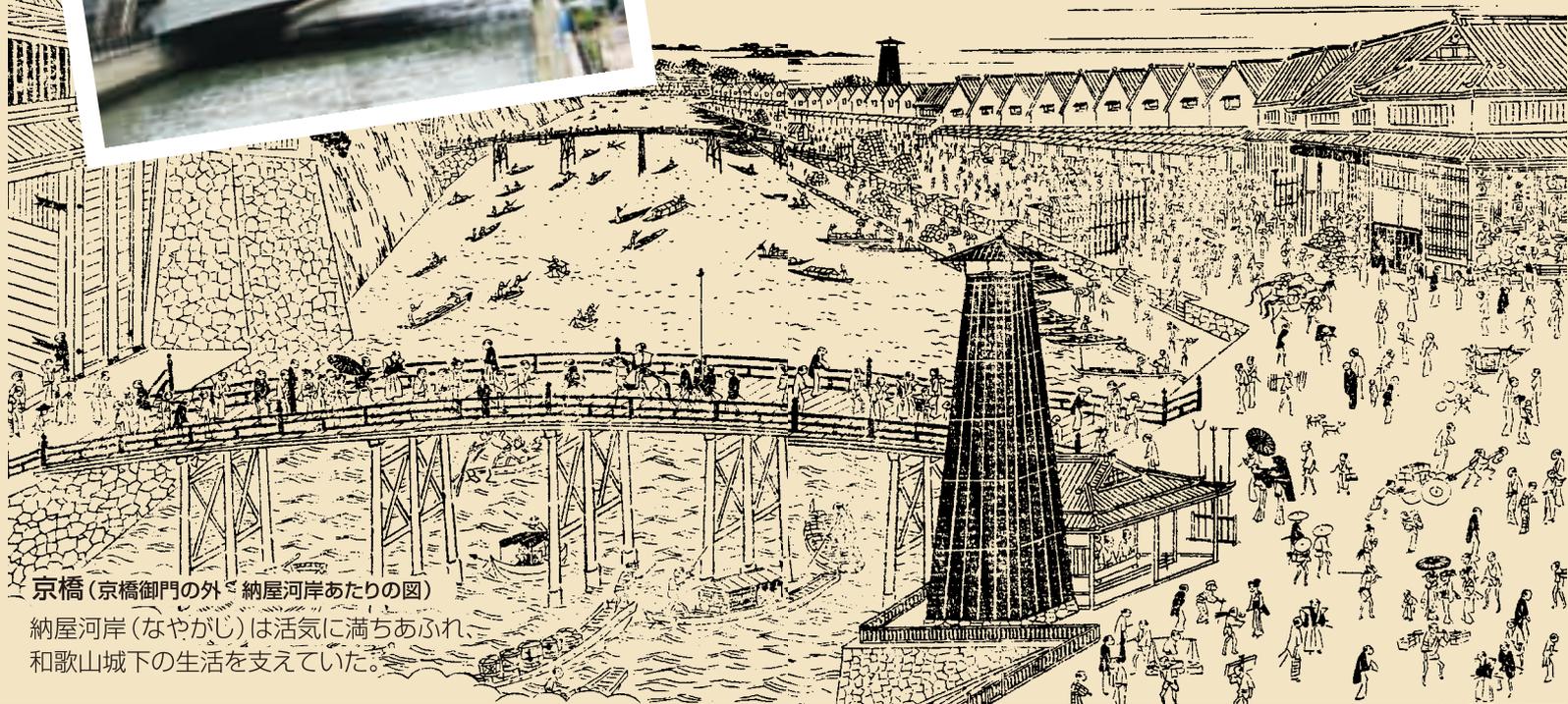
百間は一見にしかず。今年も10月19日、20日に行われる。ぜひ足を運んでいかが。



※写真は、平成20年5月18日、城フェスタオープニングセレモニーにて撮影されたものです。

京橋御門の外
納屋河岸
あじり
の図

納屋河岸ハ二丁目
立町目ヨ
玉れマ
毎朝米市
あじり
賑



京橋(京橋御門の外、納屋河岸あたりの図)

納屋河岸(なやがし)は活気に満ちあふれ、和歌山城下の生活を支えていた。

歴史を想い、城下町を散策

1 585年(天正13年)、羽柴秀吉の命で和歌山城が築城される。徳川家康の10男、頼宣が入城してからは紀州徳川家55万5千石として栄華をきわめた。2022年。

普段、気がつかない随所にその名残がある。故郷の栄華を感じとりながらちよいと城下町を散策する。

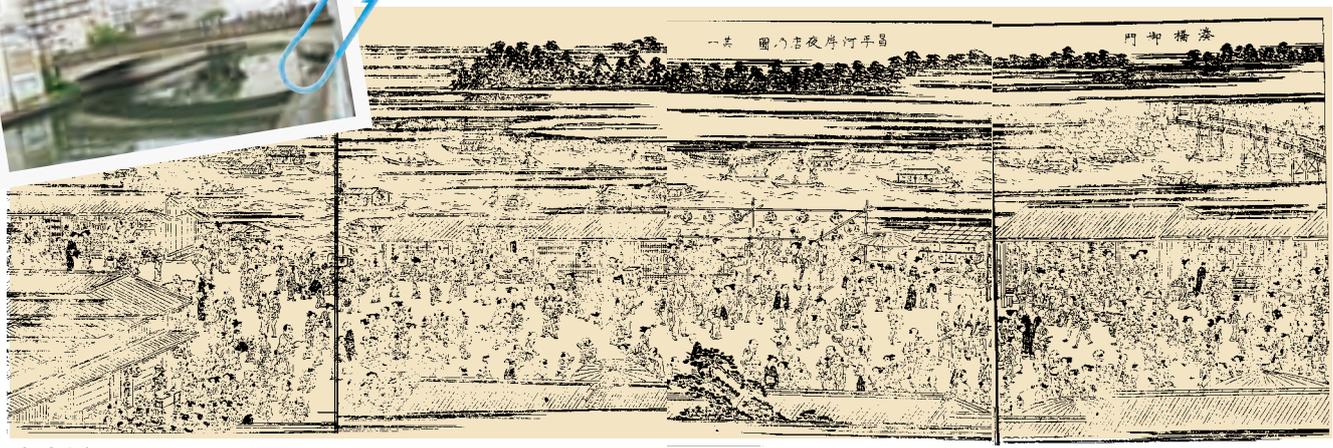
南海和歌山市駅より南へ歩くと、すぐに小さな橋「伝法橋」がある。秀吉が紀州根来寺を焼き討ちした後、焼け残った大伝法院堂の木材を京都に運ぶ途中、この場所に一時保管したという。伝法とはその名残だそう。川に沿って歩いて行くと、酒造会社の一角に藩校の碑がある。5代藩主、吉宗が紀州藩ではじめて教育の場を造った。後に10代藩主徳川治寶が「学習館」として再建し、和歌山大学の礎を築いた。

深々と感心しながら碑から南へ50mほど歩くと、石造りの橋「寄合橋」が見える。江戸時代には、行き交う人々で混雑するメインストリートだったそう。今では考えられないが、江戸時代の絵図を見ると喧騒が聞こえてきそう。

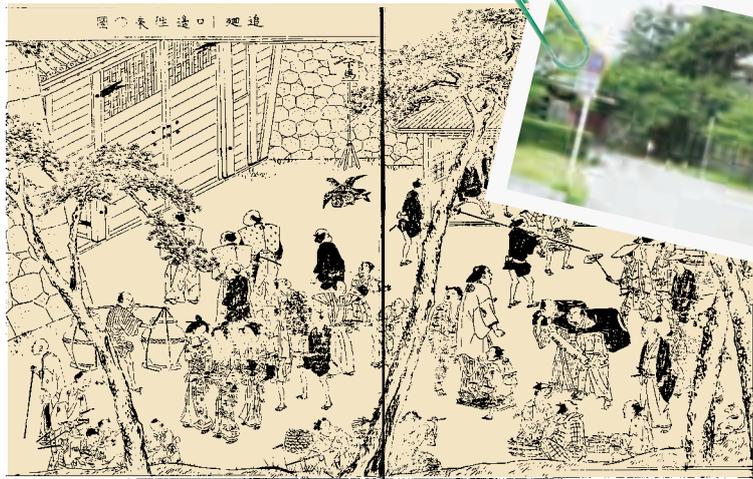
国道42号を南に越え、県庁の北側にある病院に「医学館跡」の碑がある。診療・調剤等が行われていたといい、藩内の総合病院といったところか。藩の中心部に位置されており、この周辺もさぞかし賑わっていたことだろう。確かな痕跡を辿りながら、和歌山城へと入城してみる。

和歌山城の西側にある追廻門をくぐると正面は高石垣で、内部が見通せない。追廻門という名は近くに馬術の稽古のための追廻馬場があったことからきているそう。また、和歌山城の石垣には刻印されたものが2110個以上、40種類以上確認されている。なぜ刻印されたのかは定かではないが、おもしろい形の刻印が色々あるので、探しながら歩くと楽しめる。

江戸時代、和歌山城の外堀だった市堀川にかかる京橋を境にして、武家町と町人町とに分かれていた。その西側に納屋河岸と呼ばれる米・野菜・鮮魚・生活物資などの荷揚げ場があり、大変賑わっていた。現在の市堀川沿いには、遊歩道が整備されており、散歩する



寄合橋周辺(湊橋御門 昌平河岸夜店の図)



追廻門(追廻し口辺往來の図)

門の朱塗りは藩主がいた二の丸御座間の裏鬼門(西南)にあたるので災いを払うためだと伝えられている。



和歌山城
石垣にある刻印



どんな形が
見つかるかな?



ことができるようになってきている。
今回の道程はゆっくり歩いても約二時間ぐらいで歩くことができる。歴史を辿り、いしえに思いを馳せると、見慣れた風景が違って見えてくるようだ。

たまにはそんな休日の過ごし方も、知的好奇心を呼び起こすのにいいかもしれない。歩くことが少なくなったと言われる今日、たまには散歩がてら、ふらりと出かけてみては？

イベントインフォメーション

プラハ室内歌劇場 フィガロの結婚

鮮やかに彩られたモーツァルトの最高傑作



【開催日】9月24日(水)
【時間】18:30開演(開場17:30)
【入場料】SS席10,000円、S席8,000円 A席6,000円、
B席4,000円 C席2,000円(学生)
【場所】県民文化会館大ホール

SS席・C席は
残席わずか!

(財)和歌山県文化振興財団 TEL.073-436-1331 県民文化会館内



子ども達のいじめの問題に
真正面から取り組んだ、劇団
四季オリジナルミュージカル
の最高傑作

撮影:五十嵐真氏

ユタと不思議な仲間たち

【開催日】9月6日(土)
【時間】18:30開演(開場18:00)
【入場料】S席/6,300円(1階席)
A席/4,000円(2階席)
【場所】県民文化会館大ホール

※小学生特別招待あり(詳しくは問い合わせ先まで)



撮影:下坂敦氏

(財)和歌山県文化振興財団 TEL.073-436-1331 県民文化会館内

企画展 点と面の詩情 —上前智祐・山中嘉一・坪田政彦展

個性を持たないはずの点々が様々な表情を見せる画面。上前智祐、山中嘉一、坪田政彦の作品では、点と面という形の基本に過ぎないはずの要素が、それぞれ個性的で詩的と言えるような表現を生み出しています。関西で活躍してきた三作家の作品を紹介します。

【開催日】9月13日(土)~10月26日(日)
【時間】9:30~17:00
(入場は16:30まで)
※月曜日は休館(祝日の場合は翌日)
【入場料】一般/500円
大学生/300円
(小・中・高校生、県内留学生・就学生、65歳以上の方、障害者の方は無料)
【場所】和歌山県立近代美術館

和歌山県立近代美術館 TEL.073-436-8690

企画展 古文書が語る紀州の歴史

古文書は、私的なやりとりを交わす手紙のようなものから、必要に迫られて意図的に偽作されたものまで、実に様々な目的で作成されます。一通の古文書や典籍など、書かれた文字から無限に広がる紀州の奥深い歴史の世界を紹介します。

【開催日】9月6日(土)~10月5日(日)
【時間】9:30~17:00
(入場は16:30まで)
※月曜日は休館(祝日の場合は翌日)
【入場料】一般/260円
大学生/150円
(小・中・高校生、県内留学生・就学生、65歳以上の方、障害者の方は無料)
【場所】和歌山県立博物館

和歌山県立博物館 TEL.073-436-8670



城フェスタ'08

おどろんや
タカショー + 和歌山大学
イルミネーション

8.11(月) - 8.17(日)

おどろんや 第5回紀州よさこい祭り
8.16(土)、17(日)

点灯時間 19:00 - 22:00

会場 和歌山城西の丸広場~砂の丸広場周辺



夏だってイルミネーション!

今回のテーマは「和歌山城あかりめぐり」。「ありがとう」や「和歌山の自然や人のいとなみ」をモチーフに和歌山大学の学生・教員が様々なアイデアを制作しました。

城フェスタ実行委員会 (和歌山市観光課内) TEL.073-435-1234

Songbridge in Wakayama

<国際青少年合唱祭>

サテライト・コンサート

世界トップレベルの各国招待児童合唱団と一般参加の合唱団が、和歌山城を舞台に熱唱します。

【開催日】8月9日(土)
【時間】19:00~20:30
【入場料】無料

【場所】和歌山城・西の丸広場
※荒天時、市民会館小ホールに会場変更

主催/お問い合わせ
城フェスタ実行委員会(和歌山市観光課内) TEL.073-435-1234



特別展

岩瀬広隆

散策コーナーに掲載している
紀伊国名所図会を描いた絵師

10/18(土)~11/24(月)

江戸時代後期から明治にかけて活躍した紀州の画家・岩瀬広隆(1808~1877)の作品と版本類をはじめとする関係資料を一堂に展示し、彼の残した足跡をたどります。

和歌山市立博物館 TEL.073-423-0003



岩瀬広隆(夏川清春)画 銀河草紙

編集後記

「和歌山の郷土に誇りを持てるような情報誌を発行したいので、ぜひ協力して下さい」と、今年2月に(株)ウイングの松田好司社長よりお話を頂きました。東京への出張が多く、いろんな方にお会いする中で、「自分は果たして郷土に誇りを持てるか」「郷土のよさを知っているか」という疑問を持たれたことがきっかけだそうです。

松田社長に賛同されて集まった編集メンバーは、県職員・大学教授・ボランティア活動家と、異なる経験・知識・立場をぶつけ合って、でも全員がコンセプトに共感され、約半年をかけて準備をしてきました。

タイトル「HOUBO和歌山」は、和歌山弁の「ほうぼ」=あちこち…に由来しています。和歌山の文化・歴史のほうぼをご紹介します

ことで、私たち和歌山人が郷土の歴史・文化について知り、愛し、誇りを持ち、そしてそれが地域の活性化につながれば…という本誌の趣旨がタイトルに込められています。もちろん和歌山には、他に誇れるいいところがたくさんあります。ただ「知らない」「あたり前だと思ってる」だけなのです。本誌を通して、和歌山のほうぼを「再発見」して頂ければ本望です。

ぜひ、読者のみなさんの感想をお聞かせ下さい。そして、「他にもこんないいところがあるよ」という情報をお寄せ頂いて、みんなで一緒に和歌山のいいところを発掘していきましょう。

創刊号編集長 岡 京子